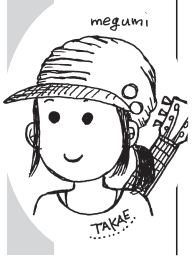
# そこかしこから反乱を！

## ネット世代と新しい社会運動について

ほしの　めぐみ




安倍政権誕生後の絶望的な展開がつぎつぎとあらわになってきている。テレビを見ても新聞を開いてもいいことがひとつもない。とどめのように2020年のオリンピック開催が東京に決まってしまい、世の中すべてにあきらめをつけたいくらいの倦怠感に襲われている毎日。この原稿を書いている前日の新聞にはフランスの新聞社の風刺画で、放射能都市で行われる五輪を皮肉ったものが問題にされた。奇形の表現の問題性はともかく、世界では東京に五輪開催が決定したことは茶番だと認識されていることがわかった。なのに、部屋から一歩外に出ると日の丸、オリンピック万歳の嵐……。こうやって季節の挨拶のようにうらみつらみを書き連ねてしまいたくなるほど、現状はひどい。というのはもちろん読者のみなさんも同じだろうからこれ以上は書かないことにします。

私に依頼されたのは、参院選での若者の反乱やネット選挙についての分析を書くことができないか、とのことだった。期待に添えるかどうかわからないが、選挙に限らずちょっと広い目で、今の若い世代や新しい運動の動きについて、どう考えることができるかを、私なりに書いていきたいと思う。

### ネットの社会運動

7月の参院選で出馬した「緑の党」からの三宅洋平、そして新党「いまはひとり」で当選を果たした山本太郎。この2人が初のネット選挙で広げた支持はとてつもなく大きく、いままでの政治のイメージをがらりと変えるパワーを持っていた。三宅洋平が現れるところはどこもかしこも若いボランティアが駆け回り、広場は「いまどき」の若者に埋め尽くされた。今までの選挙活動でこんなにも、動員ではなく、若い世代が積極的に動いたのは初めてではないだろうか？　私自身も、ネットでライブ映像や演説を聞きながら、ツイートなどで広めている一人だった。思い起こせば、12月の衆議院総選挙でも、杉並区から出馬の山本太郎の応援に三宅は駆けつけ、仲間たちと演奏をしながら、力強い言葉を発していた。その時その場に居合わせ、感動した私は以下のようなツイートをした。

「表現を大切に思うからこそ、重んじるからこそこういう音楽や文化にあふれた選挙活動ができる。私の嫌いな政党じゃ絶対こんな選挙活動できるはずない。表現や文化なんてこれっぽちも重要だと思ってないでしょう。三宅洋平ナウ@高円寺駅前」

（2012年12月14日のツイート）

私のように多くの人々がツイッターやフェイスブックで拡散される情報をキャッチし現場に駆けつけ、行けなかった街宣活動をユーチューブで後追いし、誰かが流す生中継を家でチェックする。現場で起きていることをコンピューターの前で同時間に体験し、コメントという形で参加をする。このようなネット参加型社会運動は原発震災前も上関の原発建設現場の中継、沖縄の基地反対運動の前線で繰り広げられていたものではあるが、3・11後の新しい世代の社会運動の中でさらに、欠かせないものとして変革を担うようになる。

### 2011・4・10と新しい運動の芽

私は震災後ネットの生み出した社会運動の中で、大きな変革の可能性が顕著に現れたのは、2011・4・10の素人の乱の反原発デモ、2012年夏・再稼働反対の官邸前行動、2013年の三宅洋平の選挙フェスだと勝手に位置づけている。この一発目のデモの衝撃はいまだに忘れることができない。

2011年震災前。アラブの春の映像が延々とネットから流れていた。私は画面の向こうで火炎瓶を機動隊に投げたり道路を封鎖している黒い格好をした大勢の若者たちを見て、胸をドキドキさせながら、巧妙に敵が隠

それでも自民に入れちゃうの？デモ（矢郷桃さん撮影）

された東京の日常の中で、いらだっていた。反戦のサウンドデモや集会に行っても、学生・同世代がほとんどいない。このまま自分たちが30～40代になったら、周りにお上に物申す仲間たちがいるのか大いに不安だなぁと思いながら（今でも割と不安）、ぶらぶらとしていた。

そしてあの震災・原発事故が起きた。ネット・主にツイッターで情報を集めながら不安で家から出ることができなかった数日間。恐怖とニヒリズムにあふれたツイッターの言葉を目で追いながら、何かできないかと模索し、行きついたのが、4月10日の素人の乱、原発やめろ！！！デモだった。当日、集合場所に延々と流れ込んでくる様々で個性的なひとびとの波に胸が熱くなり、何かが確実に始まった、と思った。

この時、路上に出たいと思っている・この世の中に物申したいと思っている人たちは、案外少なくないのだということを確信した。みな、表現するきっかけを探している。

そしてそれは、誰かのために世の中を変えたい、じゃなくて、まず、自分自身を解放させたいという思いがある。ただ普通に生きるのだって大変な世の中なのだから。

サウンドデモの人気はそれを楽しみながら、自分自身が解放的な気分になることができる上に、意思表示ができる点にある。意思表示を黙々とすることを強いられては、数回は続くかもしれないが、持続力がそがれてしまう。今を耐えて、いつ来るかわからない将来に捧げる……そんな思想はもう通用しない。そんなのサラリーマンの金稼ぎの無限ループみたいだ。「今ここを革命後の世界に」とアメリカの人類学者でありアナーキストでもあるデイビット・グレーバーも言っていた。その思想と、三宅洋平の空前の選挙フェスの盛り上がりは無関係ではないと思う。

## 個性的で、アメーバ的な活動にある可能性

ネットだけではなく、もちろん現実でも、選挙前にはそこかしこでおもしろい企てが行なわれていた。私の多摩・杉並周辺の友人たちは7月の参院選の前に何ができるかを模索し、反自民デモを企画した。名付けて、『それでも自民に入れちゃうの？デモ』。当日用のでっかいバナーには、ポップな字体で「いれたらキケン！　自民党」と書かれていた。新宿の街並みに、核爆弾はいらねえよ！　と歌う声が響いたり、ゾンビメイクの一団が、自民党が議席をとったらこうなる……と書いたビラを配っていて、中高生が興味津々に受け取ったり。あまりにも個性豊かすぎて、自民党がつぶしたいだろう表現の自由が、まさにこのデモ隊そのものに体現されているな～と思ったほどだった。参加者は４００名ほど。そこでは企画者の一人が作ったかわいい反自民シールが配られたりして、私自身も帽子にくっつけて歩いた。また、『選挙』で有名な想田和弘監督を呼んでのトークイベントが高円寺の素人の乱12号店で行なわれたりもした。

こういった多様な表現の抵抗運動が重要なのは、いままでデモに参加したことのない人の興味を引くことができる点もあるだろうし、さっきも言った通りそのやり方自体がもっとも参加者自身の解放感にあふれたものであるからだ。もちろん、自民は圧勝したわけで、簡単に勝つことはできないことは重々わかっている。だけれども、こういった多種多様で個性的なやり方が、少しずつ手から手へ伝わり、アメーバ的に広がる反撃になっていくと思う。これはネットにはない地道な活動である。もちろんネットの情報拡散力はすごい。かつてはアクセスできなかった隠された情報にふれることができる。でも最後に現状を変革する力になるのは、顔と顔の見える関係のつながりと、信頼関係の中にこそあると思うのだ。

（ほしの・めぐみ／事務職　対抗文化ライター、本人イラストも筆者作）